

その当時も現在も、GALLERY MOMOは東京都内に二つのギャラリースペースを持つ。2003年11月、運営が開始された、六本木のGALLERY MOMO Roppongiと、二年前、2008年10月にオープンした四国の会場GALLERY MOMO Ryogokuである。今回企画された私の個展の現場は後者、両国。

GALLERY MOMO Ryogokuは、両国園技館や江戸東京博物館のすぐ側であり、園内の画廊の中では比較的大きな。そして特異な形状のスペースである。ギャラリーの内部は、廊通りの多岐湾湾廊りから、透明なガラスの壁と、それに隣り合うガラスのドア越しに眺める事が出来る。ガラスの壁は2メートル68センチ幅、高さ2メートル68センチ。ドアは幅1メートル、高さ2メートル68センチで重い味が7本幅に渡り、取っ手が付いている。夕暮れ時、このガラス部分から、じわじわと、そろそろと、西日が展示室に近付き、入り込む。

ガラスの向こう、展示室内。幅3メートル69センチのコンクリートの床、高さ3メートル75センチの左右の白い壁。壁で黒い鉄骨の天井、それらが架へ向かって16メートル76センチ、一点透視画法の見本のように律儀に建ちあがり、この空間をギャラリーAと呼ぶ。

天井高、横幅・奥行き、これらの比率が奇妙にスケール感覚をずらすギャラリーAを通り過ぎると、受付の机がある薄暗い小さなスペースがある。この間に床はない。床はないが、ギャラリーAのその長い奥行き故か、受付スペースのさりげない薄暗さ故か、二つのスペースの間に連続性はあまり感じられない。受付スペースは、むしろ、その奥にある二つ目の展示空間・ギャラリーBと連続性を持つ。受付スペースとギャラリーBの間に床はやはりない。

ギャラリーBの天井高は2メートル70センチ、横幅6メートル72センチ、奥行きが4メートル84センチと5ミリ、さらにその奥には、ごく小規模な事務室、応接室、倉庫がある。高さ15×15センチの木製の柱が立ち、出入口があり、扉の形をした収納庫の存在を仄めかす黒い溝が白い壁に走るギャラリーBはギャラリーAと比較すると、ずいぶん地味した印象がある。ギャラリーAほど華麗な印象はないと言へば可。A B双方のギャラリーでは、黒い天井と壁面下部の幅木（スタンクス製だが）が、部屋を構成するそれぞれの要素を際立たせる。高さ45ミリのその幅木は部分部分、壁から取り外す事が出来るようになっており、外すとコンセントが現れる。ビデオ作品等の電気が必要となる場合に使用されるようだ。

ギャラリーAの奇妙な容姿開閉は、入口を入って奥へ長く組むだけに依拠しているわけではなく、その床面形状に不規則な天井の高さに多く依るものと思われる。天井が高い為に発生した巨大な左右の二枚の真っ白い長方形の存在は、展示アーティストに対して巨大な絵画作品の設置を誘発しているかにも見えるが、一方でその両面にそれを離れて眺めるだけの空間的余裕はない。

絵画における「引き」は通常、作品のサイズによって、必要とされる分量が決定される。「引き」とは、鑑賞者と作品との距離の事だ。適切な「引き」の確保は、作品の正しい印象を享受する為の一つの作法とされている。それ故に、「引き」を適切と考えられている以外の量に設定する事は、鑑賞者が逆に本来型でない鑑賞者の作品への押し方を促す役割を担う。

一方で、作品サイズと、その作品が展示された周囲の壁面（空間）の規模の割合が、作品の印象を左右する事もまた周知の事実だと思う。例えば、大きな白い壁面に小さなキャンパス作品が掛けられるとすると、ぼつんと一点だけ飾られた場合と、壁を覆うように他の大小様々な多くの作品と一緒に並べられる場合とでは、その一枚の小さなキャンパス作

品への鑑賞者の視線は、どうしても異なったものとなるだろう。作品周囲の環境はそのまま作品の視線となり、視線は作品を演出する。丁度、テッサン用視線の、線の部分を展示される部屋の構造や装飾に、白い壁面をマットに響き入る事が出来るだろう。（マット：視線の特と作品の間の埋める厚紙）視線は作品を演出するというより、変化させると行った方が正しいかも知れないし、視線は作品の一部と考えた方が正しいかも知れない。

私は、今回の展示作品を制作する為の作業場を一時的に借りた。既存の、複数のアーティストが作業場として活用しているアトリエの一角を空けてもらったのだ。もともと農家の倉庫として使われていた平屋である。内部は一辺が9メートル30センチの正方形で、天井は2メートル80センチ。仕切りはなく二本の細い柱が立つ。私はその内の一辺3メートルの9平米を借りた。周囲は平地で、田んぼが広がっている。丁度この制作を始めた頃、田に水が入れられ、私は稲の緑が日に日に鮮やかになってゆく魔法のような景色の中にいた。程なくすると近場の一端にはトウモロコシが高高く生い茂った。空が大きく、晴れた日には、遙くに富士山を眺める。

制作に取りかかったのは梅雨も半ば、空は重く、少し動くだけで油まみれの視線をいじったような気分ださせる。夏や手帳によれば、その週、雨の日は短われないらしかった。制作はまずロールを購入した描画（制作）の為の紙を計画した大きさに切る事が始まる。その日もやはり雨が降っていた。曇雨と言っても差し支えないだろうその夜、紙のロールや描画材等の制作備品を作業場に運び込む時間、びたっと雨が止んだのは幸いだった。涼気で充滿した作業場では出来るだけ早く紙をカットしなくてはならない。超長いビニール袋に入れられていた紙は、開封された瞬間から外気と交わりうとする。私は出来るだけ買ったままの紙を切ろうと思った。湿度等によって変形した状態ではなく、切った後に変形する事はまた別の話である。作業が終了したのは夜11時。再び大粒の雨が、静かに、ぼつりぼつりと黒く重い空から落ち始めていた。

翌日は手帳を裏切り暑いほどの日差しが降り注いだ。作業場に向かう車中、併置した六枚のMDFボードの上に敷いた紙が、湿度の上下によって一晩呼吸を売けただろう事思ったが、到着した頃には既に落ち着きを取り戻しているようだった。（MDFボード＝Medium Density Fiberboard・中密度繊維板）制作を開始して六日目に梅雨が明けた。カラッと晴れたその晩には当たり前に多くの虫達が、我が物産で作業場を埋め満す。私は紙を床に敷き、その上に戻り込んで鉛筆を走らせる。気付けとその周囲の地表を一面のダンゴムシがこちらへ突進して来る。正面から息を吹きかけると立ち止まり、横から吹きかけるとボールになって転がって行った。また、近所の青々とした稲穂から生まれたであろうアマガエルが、ごく稀にだが紙の上に出現する事があった。オタマジャクシから緑の成体になったばかりのアマガエルはとても小さく、なんだか折れ紙で作った紙船に針金の足をくっ付けたオモチャのように見えた。この季節、生まれたての昆虫や爬虫類の生き物に様々出会う。

作業場には全長30センチほどの子蛇までも入って来た。「鳴まれたら命がその日ばかり」（実例には熊鷹）の「ヒバカリ」というやつだろうか。頭の前部分は1センチにも満たない。次でも7ミリくらいといったところ。棒で突くと力強く胴体を取り直が、いっちょまえに転輾して来る。ギョッと眩られ、凝視した短い瞳のような印象だったが、一週間後

に、作業場を出た雑草伸びる駐車スペースで再び出会った時にはモスグリーンの変だった。腹にかけて色はだんだんと薄く白くちやけており、土の上で這う身体の輪郭はぼんやりぼやけて見えた。成長をしているのか、少し大柄になっていたようだった。見た目のままで這う東かったそれとは別の蛇だったかも知れないが、どうかそそうは思えない。しかしそれはただの見当違いだったのか、それともまた全く別の個体なのか、私はもう一度蛇に出会った。数日後、7月も20日を過ぎたその頃、朝5時、ししとと雨が降り出しているにも拘らず、どぎついピンク色をした空を眺めながら屋外にある水道で顔を洗って作業場へ戻った私はそのまま描画作業に入った。夕方も経たぬうちに、鉛筆を持ち替えるように、ふとバラバラと鉛筆を置いていた右下方へ目をやると、最初に出会った小蛇と形も大きさも、その美しい色も同じ印象の、身体を左右に回回ほどカーブさせた「ヤツ」がコンクリートの床を滑り動きで、私が気付いた事に気付いていたのか、ワルツワルツと素早く滑り動きで冷蔵庫の下へ潜って行った。なんとか夜へ逃げ出したと聞いても既に、既に冷蔵庫の下にもおらず、その後方のごちゃごちゃした、灯泡店や蛍光灯の予備やらゴミやら山積する暗闇へ消えしてしました。それはあまりに瞬間的な出来事だ。冷蔵庫の下を覗いている間にも、自分が実際にその目の存在を目撃したのか疑わしく思った。

案のとこと、窓やドアから差し込む日光でなくとも、一旦作業を始めると、私の視野に入るどんな物も、自分で使った、何気なく置いた鉛筆用り機でさえも、私の意識を釣くつぷとつと奪う。有り得る。それらは本物にもく突然飛んで来る。私自身、描画するの紙の上に動き回るもので、私にとっては周囲にある全てが動く物体。時に自分自身の手足でさえ突如どこに現れたような感覚を抱く。時間等無関係ない。

意識の焦点をその時に描画する対象に短く短くしてとも、いつだって球状の私の意識を向けたい対象以外の、周囲の様々な要素を同時に映し込んで見たいが、目まましに起きている（現実では使っていない）電波時計は既に止まっていて、外の明るさは別の二つの数字を長針と短針はそれぞれ指していた。しかしそれはど起きた時刻はいつもと変わらぬようで、6時とわかった。何故6時とわかったのかは判別としていない。理由は多分ない。ただ、それはわかっていた。私は、起床してすぐ行かなくてはならないアルバイトに何故か早く行く気にならなかった。そして「しかし行かないと二度と履けりから買める事が出来ない」（？）と、夢の中の私は私独にそればかりを気にして、アンプと椅子を繰り返り返した。そうして気に気がした頃、狂った時計がずつとけたましくアームをならし掛けているが、それはどうやら私の慣れた音色。メロディとは確かばかり違っていた。

そこから私がどうやって身を起こし、出掛ける支度をしたのかは不明だが（おそらくしていないが出来ていた）気がつくとアルバム内の「石瀬子」へ向かう為に自動車運転を運転していた。その頃には紙に行きたくない気持ちも消え去っていた。自動車の音（台形のフロントガラスから伝わる景色はまさしくいつもの慣れた顔であった。雲が薄くかかっか黒い空に虹がかかっている事に気付いた時、虹の両端部のあまりの高さ空との物質性の強さに驚くほど驚いて、そして私は目を覚ました。

この制作に使用している紙は、一作品につき一枚（縦を定える等はしない）であり、いわゆる画用紙と呼ばれる紙と同等が、それよりやや薄手である。それ故、筆を斜め付ける作業は、同時に紙を丹念に伸ばし広げていく行為となってゆく。描画に込める力の加減その伸ばされ具合は部分によって様々。また、直経6センチの細い鉛筆を軸として、紙は輪圓にも巻かれた状態で販売・購入される事が起因で、巻かれた方向と同方向に、縦い複数の起伏（たわみ）を持つ。この度合いも、原因が先天的か後天的か、まだはつきりわかっていないが、作品毎に異なる。描画もまた光の差し込む角度や光量によって見え隠れする。

朝になると窓やドアから光が入って来る。太陽光線が直接太陽から作業場の上のトタンに射れ始めるや否や、室内の温度は急速に上がってゆく。熱は、大気から私の身体に伝って来るというよりも、私自身の皮膚と骨の間部分から発せられている気がする。汗が噴き出す。光源が増える事が、制作の現場状況を一定させる。光源はさっきまで作業場に備え付けの蛍光灯だけだった。開け放している（扉戸をした）ドアと窓から入って来たいくつもの異なる角度・量の真っ白で強烈な光は、夜中をかけた慣れ親しんだ作業場内のあるあらゆる箇所を駆逐し、それらがさっきまで覆っていた関係をことごとく引き剥がす。どぎついピンク色をした空を眺めながら屋外にある水道で顔を洗って作業場へ戻った私はそのまま描画作業に入った。夕方も経たぬうちに、鉛筆を持ち替えるように、ふとバラバラと鉛筆を置いていた右下方へ目をやると、最初に出会った小蛇と形も大きさも、その美しい色も同じ印象の、身体を左右に回回ほどカーブさせた「ヤツ」がコンクリートの床を滑り動きで、私が気付いた事に気付いていたのか、ワルツワルツと素早く滑り動きで冷蔵庫の下へ潜って行った。なんとか夜へ逃げ出したと聞いても既に、既に冷蔵庫の下にもおらず、その後方のごちゃごちゃした、灯泡店や蛍光灯の予備やらゴミやら山積する暗闇へ消えしてしました。それはあまりに瞬間的な出来事だ。冷蔵庫の下を覗いている間にも、自分が実際にその目の存在を目撃したのか疑わしく思った。

業場の外壁のトタンに射れ始めるや否や、室内の温度は急速に上がってゆく。熱は、大気から私の身体に伝って来るというよりも、私自身の皮膚と骨の間部分から発せられている気がする。汗が噴き出す。光源が増える事が、制作の現場状況を一定させる。光源はさっきまで作業場に備え付けの蛍光灯だけだった。開け放している（扉戸をした）ドアと窓から入って来たいくつもの異なる角度・量の真っ白で強烈な光は、夜中をかけた慣れ親しんだ作業場内のあるあらゆる箇所を駆逐し、それらがさっきまで覆っていた関係をことごとく引き剥がす。どぎついピンク色をした空を眺めながら屋外にある水道で顔を洗って作業場へ戻った私はそのまま描画作業に入った。夕方も経たぬうちに、鉛筆を持ち替えるように、ふとバラバラと鉛筆を置いていた右下方へ目をやると、最初に出会った小蛇と形も大きさも、その美しい色も同じ印象の、身体を左右に回回ほどカーブさせた「ヤツ」がコンクリートの床を滑り動きで、私が気付いた事に気付いていたのか、ワルツワルツと素早く滑り動きで冷蔵庫の下へ潜って行った。なんとか夜へ逃げ出したと聞いても既に、既に冷蔵庫の下にもおらず、その後方のごちゃごちゃした、灯泡店や蛍光灯の予備やらゴミやら山積する暗闇へ消えしてしました。それはあまりに瞬間的な出来事だ。冷蔵庫の下を覗いている間にも、自分が実際にその目の存在を目撃したのか疑わしく思った。

も深夜か早朝には、書き途中の文章を新しく印刷し直し、クリアファイバーにゴットて折り込む。大抵、一日の終りの印刷時には寝れていないし、一日の始まりには次の要件には履かれていない。そしてクリアファイバーは朝に折り込まれる。鉛筆やボールペンによるメモ書きが所々に走る。古い紙はだいたいの場合、セブンイレブンかサークルかローソンか、いずれにしてもコンビニエンスストアの前燃え尽きたゴミ箱の隅に、適当に敷かれて放り込まれる。場所はどこでもよかったが、腕に手を突っ込んで、ガサガサと古い紙が私を懐かしい気持ちにさせる時に、丁度良く出会うのが、コンビニエンスストアなのだ。

冬であれば白、怒など外気を、表からでも内部からでも、板が何で透光してしまえば寝る事だが、この始まったばかりの夏の暑い年中そういっわけにもいかない。

案のとこと、窓やドアから差し込む日光でなくとも、一旦作業を始めると、私の視野に入るどんな物も、自分で使った、何気なく置いた鉛筆用り機でさえも、私の意識を釣くつぷとつと奪う。有り得る。それらは本物にもく突然飛んで来る。私自身、描画するの紙の上に動き回るもので、私にとっては周囲にある全てが動く物体。時に自分自身の手足でさえ突如どこに現れたような感覚を抱く。時間等無関係ない。

意識の焦点をその時に描画する対象に短く短くしてとも、いつだって球状の私の意識を向けたい対象以外の、周囲の様々な要素を同時に映し込んで見たいが、目まましに起きている（現実では使っていない）電波時計は既に止まっていて、外の明るさは別の二つの数字を長針と短針はそれぞれ指していた。しかしそれはど起きた時刻はいつもと変わらぬようで、6時とわかった。何故6時とわかったのかは判別としていない。理由は多分ない。ただ、それはわかっていた。私は、起床してすぐ行かなくてはならないアルバイトに何故か早く行く気にならなかった。そして「しかし行かないと二度と履けりから買める事が出来ない」（？）と、夢の中の私は私独にそればかりを気にして、アンプと椅子を繰り返り返した。そうして気に気がした頃、狂った時計がずつとけたましくアームをならし掛けているが、それはどうやら私の慣れた音色。メロディとは確かばかり違っていた。

私は机に置いたパソコンに向かい、マイクロソフト・ワードで文章を打つ。打つ中で、私は、事ある毎に、画面全体の表示サイズを変更し、フォントの種類やサイズを変更し、行間、文字間を微妙微妙に揺らし、いくつもの文字色を試す。文字色は、黒、灰色80％・50％・・・赤、濃い赤、シググリーン、ライム。部分的に薄くオレンジ等。さらに書き留めてから書き終えるまでの間、繰り返しプリントアウトし、鉛筆と消しゴムを一筆に持ち歩き、読手返す。

紙に印刷された文章を読む時と、ノート型コンピュータの液晶モニターに映し出される文章を読むの間には、けして小さくもない隔たりがある。これは、おそらく沢山の人が感じている事だろうと思う。液晶モニターによって、白い背景に浮かぶ文字は薄くも濃くもなる。ひと時に、視線を早なるモニターに垂直に当たる部分は点で点でない、それも確実に消えるのは片目の時だけだ。

両目では、それぞれのが、それぞれ異なる点を垂直に見ている。それと同時に、互いの目が垂直に見ている点を、垂直に見ていない。右目が直に見ている点を、左目は斜めから見ている。左目が直に見ている点を、右目は斜めから眺める。その結果、脳はぼんやりと画面一帯を正面に見ているという情報を得るが、それと引き換えに、画面に垂直である知覚を得る事は出来ない。

私ら文章の内容に変化がほとんどなかったとしても、毎日、少なくと

たスーッと目を立てずに移動、それを繰り返す。その機軸に規則性は無いようだが、何かを縁取で伝えようとしているかのようにも見える。視線を紙の外、コンクリートの床に向けると、いつからなのか、別の筆跡が死んで干渉し始めている。低空飛行する筆跡はやがて紙から離れ、もう一匹の蜜蜂（の死骸）の近くに膝を下し、また何やら膝を洗い始めた。私はここで再び描画に戻る。

しばらくした後、トイレから帰った私は、依然としてコンクリートの上には蜜蜂の異変に気付いた。死骸となった蜜蜂のすぐ横で、もう一匹の、先ほどまで顔を洗っていた蜜蜂が腫も「く」の字に字づつて仰向けになり、身体の内側目から異い黄緑色の黄粉だか内臓だかを垂れ流し、風にたなびくようにヒクつている。片方の羽はだらしなく上空に向けられ、もう片方の羽は自ら垂れ流した液体に濡かって、びたっと床に張り付いている。そうして見ているうちにビクリとも動かなくなった。それをどうにかするの私はないんだか運命で、ヘッドホンで聴いていたライヒの『African Rhythms』のポリリズムを上げ、制作に戻った。

文字間・行間・文字色・フォントのサイズ・フォントの種類、当然それらの有り様によって文章は「読みづらく」も「読み易く」もなる。しかし実際の状況はそう切った獲った出来程に単純ではない。「読み易い」と「読みづらい」の間は意外なくらい広いし、「読み易い」にも、「読みづらい」にもいるいるある。それぞれそれぞれに読むリズムをよって、また、読むリズムを断つ。そのスピードも様々で、文章の状態によって、一息に読める量も変化して来る。

読まれる内容に、より適切な字面とはどんな状態か　字間を詰めて、あえて読みにくくするのはいいのか。だとするとその程度は・・・文字色の薄さによって疲労の感傷か、読んだ時の心象は同じ言葉でどう変わるか・・・いっせ全文をい方が・・・部分によって選んだ方が・・・誰かが読まざる事を知っているのが半分、書いてゆく私自身がイメージを広げるのが半分。赤い字の文面は、赤い字の文面ではない「読き」を作る。

透過光のコンピュータ画面やプリントアウトされた紙を眺めていると、文字と文字の間や文字の字の隙間に、嵌り込まれていくような気分になる事がある。一言中の4辺の余白、各辺はだいたい120・45ミリを行ったり来たり。行間と字間が、私の書いた文章が形作る文字の塊の密度状態を作る。当然ながら行間や字間が詰まれば1頁に収まる文字数も増え、広がれば減少し、文字の塊が紙面を支配する様態も変化する。字間が広がっていくと、文字は最初の姿を取り戻すのが、象形文字のように見える事がある。音段押しているような、いつもの意味が薄白さになる。文章の一部であるよりも、数本の線による小さな絵として見えて来る。そして、隙間の余白が浮上して来る。僅かに線によって穴穿れを与えられた紙と、小さな絵としての文字。その間を私は行き来する。

私は、サム・フランシス（1923　1994・米画家・アンフォルメルや抽象表現主義の流れを汲む）の見上げる程に巨大なキャンパス絵画を思いつた。白い背景に、鮮やかな青や赤や黄色の筆致・ドローイングを描いた絵画である。

1つのがめられたが、確か場所は東京都現代美術館だったと思う。私の目は、図として描かれた色彩よりも、背景色の白に吸い込まれ、その空間を泳いだ。目の分量は、作品によりのいるらだったが、それがごく僅かしかない場合でも、私の焦点の予先は、やはり、同じであった。その白色は、どの作品でも、キャンパスの地色ではなく、それぞれの絵画の高みに、自ら塗られていたようだった。

ある時、描画をしていると紙の上に蜜蜂が一匹。ほとんど前足ばかりを動かして、ごちごちと後退していた。後退し、立ち止まってもその腿（前足）で膝を揺らうような（膝がそうするように）仕草を見せ、また後退する。後退し、後退し、稀に前進する。まあいいやとほうっておいたらしばらくすると、今度はホバークラフトのように紙の表面をスーッと、およそ80センチの距離を低空飛行し、数歩歩いて方向を変えてはま

【2010年7月初旬　8月初旬】